

## 太田先生を偲んで

服 部 良 一

太田先生が心臓麻痺で急逝されたのが、昨昭和三十三年八月八日、早いもので、あれからもう一年経つ。

昨年九月九日の朝、大学ではもう前期の試験が始まっていたが、そのために出勤途上、出会った某教授から、太田さんのお訃音とさかされ、暫くは本当とも思えなかつた。異常なショックを受けた。何故なら昨日のひる過ぎまで元気で話し合つたのだから……

九月八日は大学の社会科肉俵の教官が全員集つて、新しく出される小・中学校の社会科指導要領の批判検討をやるうというので、当日十時頃から、私のオリエンテーションを中心にする頃まで研究会が持たれた。太田さんもこの会合に出席された。その後で研究室へ戻つたとき、病氣のため論文提出ができません、卒業延期になつている学生M君の論文審査の口答試問の日割りと同日にするか、と話し合つて別れたのが最後であつた。太田さんはそれから帰宅して奥さんと二人きりで、遅目の昼食を共にして、その日は今までついそしみぐ話し合つたこと

もなかつたのに、子供の将来・その教育など、あれこれとゆくり話されたそうだ。午後何か調べものをして書斎に居る時、来客があつて四時頃対談中、急に胸が苦しくなつて「一寸失礼する」とかゞまれて、そのまゝいけなくなつた。客が奥さんと呼んで、奥さんにかゝえられたまゝ、太田さんは救分のうちにこときれたのである。医師も向に合わなかつた。

その春にも太田さんは、心臓の発作があつたようである。あとで聞くところ、鼻と口を抑えて登山するみたいで苦しい。心臓なら祭に死ぬると思つたのに、こんなに苦しいものなら死ぬない」と笑つてみえたが、太田さんが心臓病で、県立大学附属病院へ入院されたのは、いつの頃だつたか。確か六・七年前だつたように思う。遷延性心臓内膜炎とか？ いう病名で、原因はムシ歯や扁桃腺のウイルスからでもなるといふ。難かしい病気だつたようで、塩気の辛いものは心臓に良くないと、食養生を妨めたことを思い出す。

私も昨年、梅雨期から夏にかけて身体が変調で、レントゲン検査をやつたり、一時は大手術を覚悟したので、生死の向題には敏感であつた。嫌いな生命保険にも入る氣になつて、太田さんの紹介で或る会社の社員が来て契約を結んだのも、九月に入つてからのことだつたから、向彼につけて太田さんの急逝は私にとつてショックだつた。人生の無常を、まざくと見せつけられた感じだつた。

一昨年は学部内の奥さん方が、相ついで三人も亡くなつた。この人たちは何れも相当長期間の斗病生活の後だつたが、昨年は春以来、教官の死が続いた。それも不慮の死や脳出血といふ

たまことに宗氣ない死だつた。教官の向で、去年は又、今年も男の番かと云う人もあつたが、太田さんも自宅で、男の三人目の候補者は誰か、その中の一人は自分だと奥さんに冗談を言つていられたとか。太田さん自身もまさか、自分がそれに該当するとは、本氣では思つてなかつたろうに……。

去年の春、不慮の死を遂げたY教授の追悼会が、津市内の寺院で催されたが、参会しての帰途、飯が雨に濡れて帰ろうとする私に、自転車で帰宅する太田さんは、自宅が近いからと、参の傘を貸してくれて、自分は雨の中を真直ぐ走つて行つた。そのとき貸してくれた傘は、木綿の古びた子供用だつたのが妙に印象に残つてゐる。

太田さんは、辺幅を飾らない人だつた。戦後、教官の中で奥さんの帯芯で休つた？ 靴を肩にかけていたのは一番長かつたのでなかつたかしら、戦後、名古屋大学に留學一年間の通勤も多分、この姿だつたと思う。何かの機会に学生がゼスチニアでこの靴の真似をして、太田先生を表現したことがあつた。それで太田さんも氣がついて、「この靴は自分だけか」と苦笑して革靴になつたのは、それから向もなくだつたようだ。そんな奥は随分無頓着な人だつた。

「太田実」といふ名は、珍らしくシンメトリーにできてゐる名である。むかし或る衆議院議員候補者は、「私の名は裏から読んでも、表からみても全じ名である。私に表裏はありません」とやつて、見事当選したという。太田さんも表裏のない人である。その点では嫌味のない人である。先生仲向でも時折、表裏を使いわけの氣の許せない人、嫌な人向といふものがあるも

のだが、この人はその点では至極淡泊な人であつた。教授会でも考々の意見を述べても正論だつたし、指導的・建設的な意見が多かつた。この人の性未の難聴が時折、たくまぬいユーモアとなつて、会議を和やかにすることもあつた。旧師範時代に、教務課長や補導部長に任じたのも、その指導力・実践力が賞われてのことだつたらうし、学部の教職員組合の責任者に選ばれたのも、その信頼からだつたと云えよう。

太田さんはよく他人の世話をする人だつた。学生の卒業時の就恥にも足ために飛び廻つて、入学試験の採点とかち合つて私どもを慌てさせたこともあつた。卒業後の教え子とも私的な、随分深い交際もされてる風だつたし、当然彼らからも慕われること深かつた。また太田さんは、我々交際範囲が教官仲間に限られると云つた狭いのと違つて、随分広い範囲の各層の人たちとつき合つて居られたようだ。これはこの人の趣味の基がとリ持つていたようだが、・、そしてこの道では有段者として学内でも屈指の強さで、これが太田さんの死を早める一因となつたのではないかと思える節もあるのだが。

惜しい人を亡くしたものである。これからという人である。大学にとつても、太田さんの家庭にとつても、

ライフワークとして、現代史、特に資本主義の上昇期、帝国主義の発展について思を澄めていられたようだが、こうした完成を見るに至らず、五十才に充たず若死された太田さん。

評判の大声で独特の格調ある講義が、時とする隣の教室まで筒抜けにきこえたものだが、いまはそれもさかれぬ。

「太田さん、惜しいことなしたものですな」と、幽明境を異にする

する太田先生に話しかけてみたい気がする。そして、向う側から太田さんが、いつも見せる羨ましい顔に微笑を浮かべながら、「あ、とうとうやられたよと気軽にのそくような感じである。太田さんの死は、何だか未だ本当とも思えないような昨今である。

太田さんの死を聞いたその夜、終列車までお通夜をしたが、翌十日の葬儀には折悪しく私の教科の試験で、他教官にも監督を依頼しているまゝ、私は参列できなかった。その出棺時刻に俄か雨があつたのと、亡き人を惜しむ雨と、教室でしみじみ感じることを感じ出す。この原稿を認める今宵、またその事を思い出させるような雨である。

太田さんが死の直前、虫の知らせか子供への教育について奥さんと語つたという四十一男の遺児たちは俊秀である。太田さんが大学を了えて、初めて教恥に就いた同じ女学校の先生だつた奥さん、この教育熱心な母を中心にかンツリ、スクラム組んで勉学に励んでいる遺児たちの姿も雄々しい。教職員関係者の同情も厚く、再びの教壇復帰を希う末亡人に対して、も、臍側は好意的である。向上を自指して協力して斗つている遺族の姿を、地下の太田さんは「よくやつてるなあ」と、剛の温容で見守つてに違いない。

x x x

先般、学芸学部の教官・取組の好意の結晶を、遺児育英資金の一助にもと並前に贈呈したのだつたが、偶然の一致だろうかそれが「ヒ」という数字に妙に因縁が深いのに気付いた。贈呈

したの次七月七日、差上げた債券が七分利付、債券額面も七の数字がつき、発行までの事前の利子というのがこれまた七七七円と七の連続、この原稿を書くために、太田さんの略歴を調べたら、意匠の現住所が七七番地である。不思議な暗号である。私は数字の神秘とでも云うか、自身の運命を七の数字に関連させて考えたことがあるが、古代ギリシヤの神や哲人にも、神聖数字というものを考えた人々もあつたようだが、・・・とも角神秘を感じたものである。この向、末亡人とそんな話をしたら「それは七転び八起きだ、その七に違いない、私ほうなづいたのである。」

(昭和三四・九・二四夜)

★ 大田先生略歴

- ◆ 本 籍 三重県一志郡阿坂村大字小阿坂二五三二番地
- ◆ 住所(遷居) 津市乙部町七七番地
- ◆ 生年月日 明治四三年二月二日
- ◆ 学 歴 三重県立津中学校(大正一一—昭和二)
  - 中三高等学校(昭和二—五)
  - 京都帝国大学文学部史学科(昭和五—八)
  - 名古屋大学へ内地留学(昭和二四—二五)
- ◆ 職 歴 三重県立桑名高等文学校教諭(昭和八)
  - 分 河原田農学校教諭(昭和十)
  - 分 本本中学校教諭(昭和一三)
  - 分 三重県師範学校教諭(昭和一六)

三重師範学校助教 (昭和十八年)

全 教授兼教諭 (昭和十九年—二月)

叙高等官七等叙従七位 (昭和二十年三月)

三重大学助教 (昭和二十四年六月)

全 教授 (昭和三三年九月)

叙正五位勲五等瑞宝章 (昭和三三年九月八日)

その向、教務課長(昭和二二)・補導部長(昭和二四)

を歴任して校務のためにも盡された。

◆ 研究業績

一、著書

帝国主義時代におけるヨーロッパ列強の国際関係

(昭和二七・七・二〇)

西洋史概説

(昭和二七・一二・一五)

西洋史ノート(名木愛知学大専攻氏と共著)

(昭和二九・六・一)

西洋史概説(名木・金沢大専攻氏共著)

(昭和三二・六)

一、論文

奥地を中心とする近世バルカン問題への私見

(松原15号、昭和九・七)

古代より中世へ(三重大学々芸学部研究紀要I昭和二四・一一)

帝国主義時代におけるイギリスの外交政策について

(右全 II 昭和二五・三)

資本主義のイトス

(右全 III 昭和二五・九)

アジアにおける民族主義の発展

(学芸評論、昭和二七・九)

大英帝国の危機

(研究紀要VIII 昭和二七・一二)